日本近代建築における装飾表現

津村研究室 222046 松井悠衣

研究背景

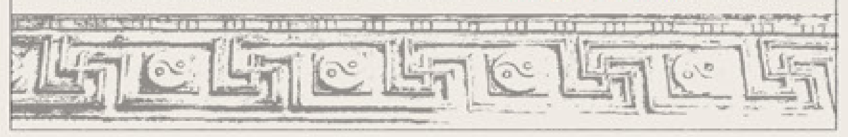
はじめに

動機・既往研究

歴史的・文化的価値を有する建造物は日本の文化として保護される対象となるが、その価値は調査研究に基づき判断される。近年では歴史的建造物を積極的に活用する動きが高まり、その価値を保存しつつ変更を加えることが一般化している。固有の価値を適切に捉えるにあたり、より**細部での歴史的価値**の評価軸を構築することが必要となる。この一端として日本における近代建築の細部といえる建築装飾の建築史学的な位置付けを行いたいと考え、本研究の主題を決定した。

従来の近代建築史研究においては、多くが建築家の理論や建築の構造、空間計画、様式に着目しており、特に装飾は網羅的な紹介か様式構成要素の一つとして扱われるか、一件の建築、一つの種類に限定して論じられている場合がほとんどである。

実作の建築装飾は建築ごとにさまざまであり、用いられる図像や配置、表現方法などは非常に豊かである。つまり手がけた建築家や技術者、社会、様式、図像表現のアレゴリーなど**建築装飾の背景を網羅的に分析**する必要がある。



目的・意義

日本人建築家による明治から昭和にかけての西洋の様式を基礎とした建築について、その装飾の主題や制作手法からなる表現の決定には、単に様式に準拠したものでなく、設計者やその建築を取り巻く社会の意図が表れていると考える。

本研究では建築史、建築教育史、図像学的または文化的視点と設計者の思想から、日本の近代建築に見られる**装飾表現の意図**と、設計者や社会における**建築装飾への考え方とその変容**を網羅的に読み解くこと目指す。また以上により近代建築における建築装飾の位置付けや意味を示すことを最終的な目的としている。

また本研究が建築固有の価値の認識や建築家、技術者、建築・芸術・文化など、近代建築史をはじめとした建築装飾に関わる研究の一助となることを意義とする。

方法・対象・定義

研究方法は既往研究や一次資料の調査と、記録資料や現地踏査による視覚での分析による。

研究対象は建築教育が開始した明治6年から太平洋戦争終結前の昭和20年までに竣工した、**建築高等教育を受けた日本人**の設計による建築（以降「日本近代建築」）に施された装飾とする。対象地は基本を日本国内とし、台湾など一部当時の日本の占領地の建築も参照する。

また本研究においては、建築装飾を「建築やその付属物において、構造や材料など**合理的機能から独立した**感覚的効果を高める美術的表現」と定義し、その種類、表現方法、設計者や制作者を限定しない。

近代建築通史

本研究を進めるにあたり、明治から昭和初期にかけての建築全体の主な動きを整理する。

〜明治中期　日本近代建築の幕開け

鎖国が解かれた明治初期、積極的な欧化や殖産興業の推進を掲げた新政府の政策により、御雇外国人により本格的な西洋様式の官庁の建設、**西洋式の建築教育**が開始した。明治10年にジョサイア・コンドルが来日し、工部大学校造家学科を請け持つ。同12年に辰野金吾、曾禰達蔵、片山東熊、佐立七次郎の4名が卒業し、日本人建築家が誕生することとなる。彼らや妻木頼黄ら明治初・中期の第一世代と呼ばれる建築家は「**美術建築**」（建築は建築家と芸術家の共同によって作り上げるべき）の考え方をもとに、国家建築を中心とした建築設計を進めていく。とりわけ片山の東宮御所（同42年）は最新の構造技術とフランス人と日本人の技師を充てて作り上げられ、本格的な宮殿建築として評価される。

〜大正前期　変わりゆく建築様式

明治中期より、コンドルの後継である辰野に教わった伊東忠太や武田五一、横河民輔などの第二世代が生まれる。新しい技術や思想の出現、普及により初期の西洋の歴史主義や美術建築などの考え方を超えた新たな建築表現が試みられる。明治25年ごろより日本を含め東洋の伝統建築様式の調査が始まる。伊東は構造や様式の世界全体の変遷を踏まえ「建築進化論」を示し、**様式折衷**的な実作を試みている。また同30年頃には、武田などにより西洋近代のアール・ヌーヴォーやセセッションの建築運動が日本に持ち込まれ、後の世代に影響を及ぼす。同43年に開かれた討論会では、国会議事堂建設にあたり第二世代を中心に今後の**国民的建築様式**について議論が展開した。

〜大正後期　新たな技術と表現

大正時代より歴史主義建築は成熟し、様式の選択と多様化が進むようになる。また明治後期に広まったヨーロッパ各国の新たな建築運動、特にセセッションが影響し、後藤慶二や分離派建築会の若き建築家などをはじめとした「**表現派**」による新たな建築意匠が見られるようになる。

歴史主義、合理主義の双方から独立し、鉄骨や鉄筋コンクリートの構造と一体化した自由な建築美術表現が模索される。

大正後期〜　近代社会と交わる建築

大正後期からは社会全体の発展や関東大震災を契機とした構造の重要性認識の高まりなどを社会背景に持つ。西洋の様式に基づく建築表現は、民間のオフィスや商業ビル、邸宅など幅広い用途で選択されるようになる。同5年ごろの設計競技による作品には、西洋の様式建築に日本趣味を結合させる「**帝冠様式**」と呼ばれる建築表現が出現する。また社会の要望や西洋近代の影響から**合理主義**が台頭すると、従来の装飾性は幾何学的な全体意匠に昇華されるか、排除されるようになる。実用主義的思想は大正前期より佐野利器や野田俊彦の建築論などに見られるが、実作はライトやコルビュジェらに師事した建築家たちにより昭和以降に見られるようになる。結果的にこのモダニズムは戦後の高度経済成長期に建築や都市設計の中心的思想になる。

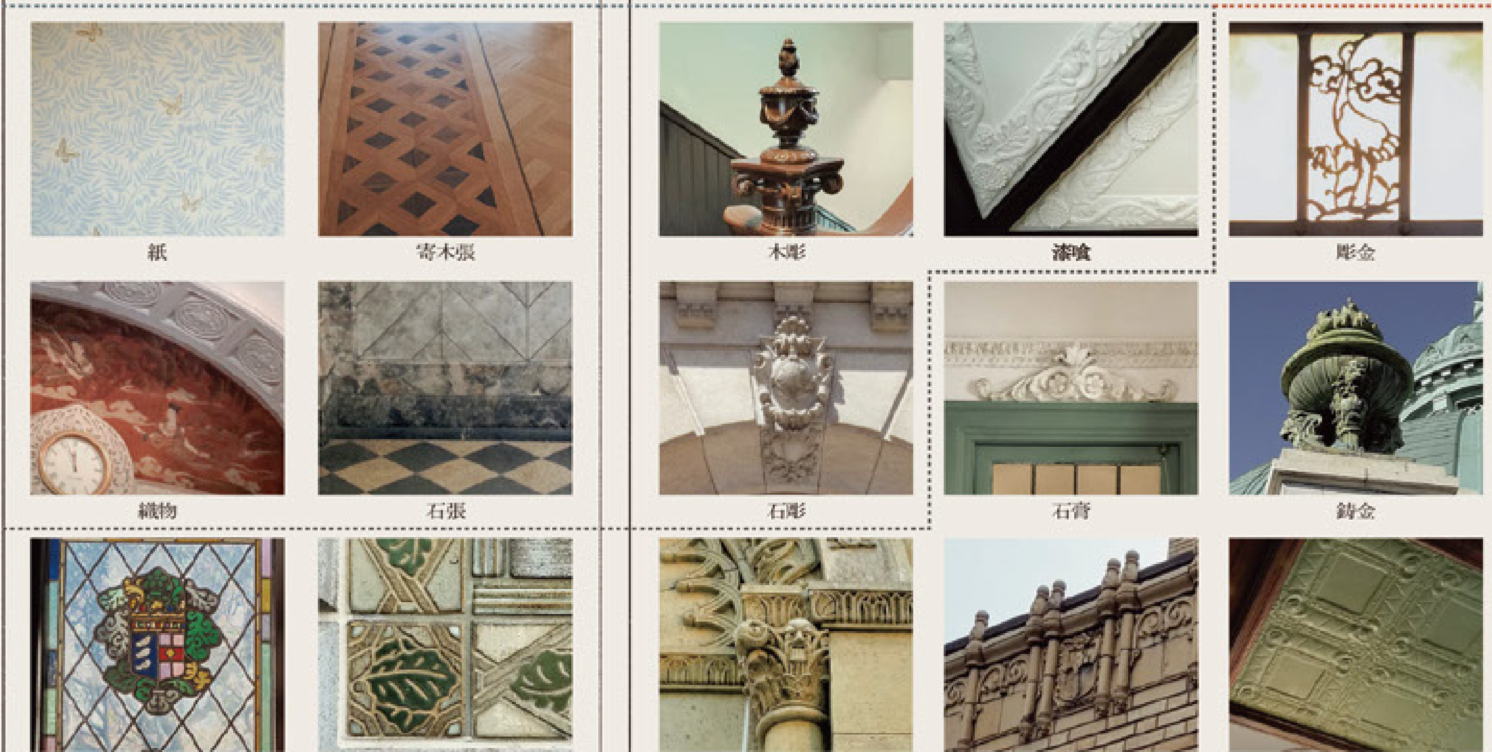
建築装飾の実態

建築装飾の種類

建築装飾として扱われるものとして、平面装飾はタイル、ガラス、絵画ほか、寄木、石張、織物、紙、リノリウムなどが挙げられる。**立体装飾は漆喰、石彫、木彫、彫金などの加工によって製作する**ものや、石膏、テラコッタ、セメント、鋳金、金属プレスなど型を用いて成形するものがある。

辰野金吾は「家屋装飾論」（明治16年）において、装飾の種類を「**漆喰塗細工**」「**張紙**」「**デステンプル（水彩異彩色）**」「**フレスコ（湿乾両地彩画）**」「油絵」「織物張付」「木細工」「寄せ木細工」「大理石板寄せ細工」の9つとしているが、時代が下ると新たな装飾技術が見られるようになる。**寄木や木彫、漆喰、織物、絵画などは**日本で従来行われていた建築装飾方法であり、近代以降の建築装飾としても早い時期に見られる。またステンドグラスは、教会や外国人邸宅の建設のため早い時期にヨーロッパより持ち込まれており、明治後期ごろから既に日本にて製作が始まっているため比較的早い時期に用いられている。

明治初期から中期ごろまでは近世までの技術と、西洋建築の模倣による装飾方法が用いられていたことがわかる。一方でテラコッタ、セメント、リノリウム、人造石などはその技術が日本に輸入され製造が可能になってから用いられているため、その出現が大正時代ごろと遅い傾向にある。



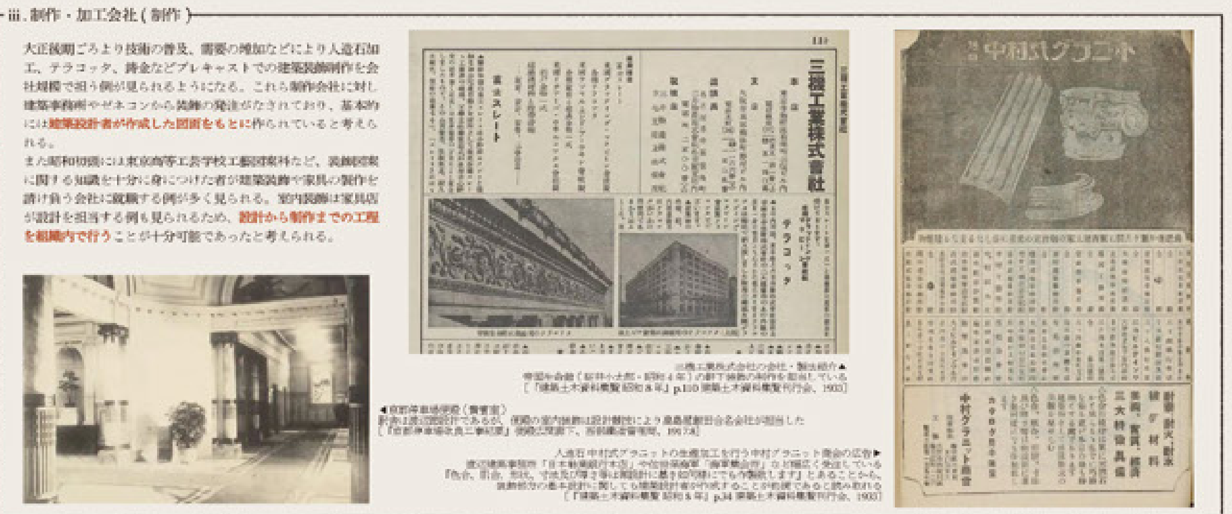
装飾制作過程

i. 芸術家（設計・制作）

絵画や彫刻、ステンドグラス、タイルなど一部の装飾は、建築の計画をもとに建築設計者から委託され、専門とする**芸術家が設計から制作まで請け負う**場合がある。これは美術建築の考え方、ひいては西洋建築の装飾手法として用いられている手法であり時代に関係なく取られているが、皇室建築や公会堂建築、要人の邸宅など象徴性の高い建築で一部分にのみ使用されている例が多い。建築家だけでなく芸術家でも芸術作品を建築装飾として用いるべきと考えている者は多い。松岡壽、黒田清輝（洋画家）、竹内久一、朝倉文夫（彫刻家）、濤川惣助（七宝作家）小川三知（ステンドグラス作家）などの芸術家による建築装飾作品が確認できる。

ii. 装飾技手（制作）

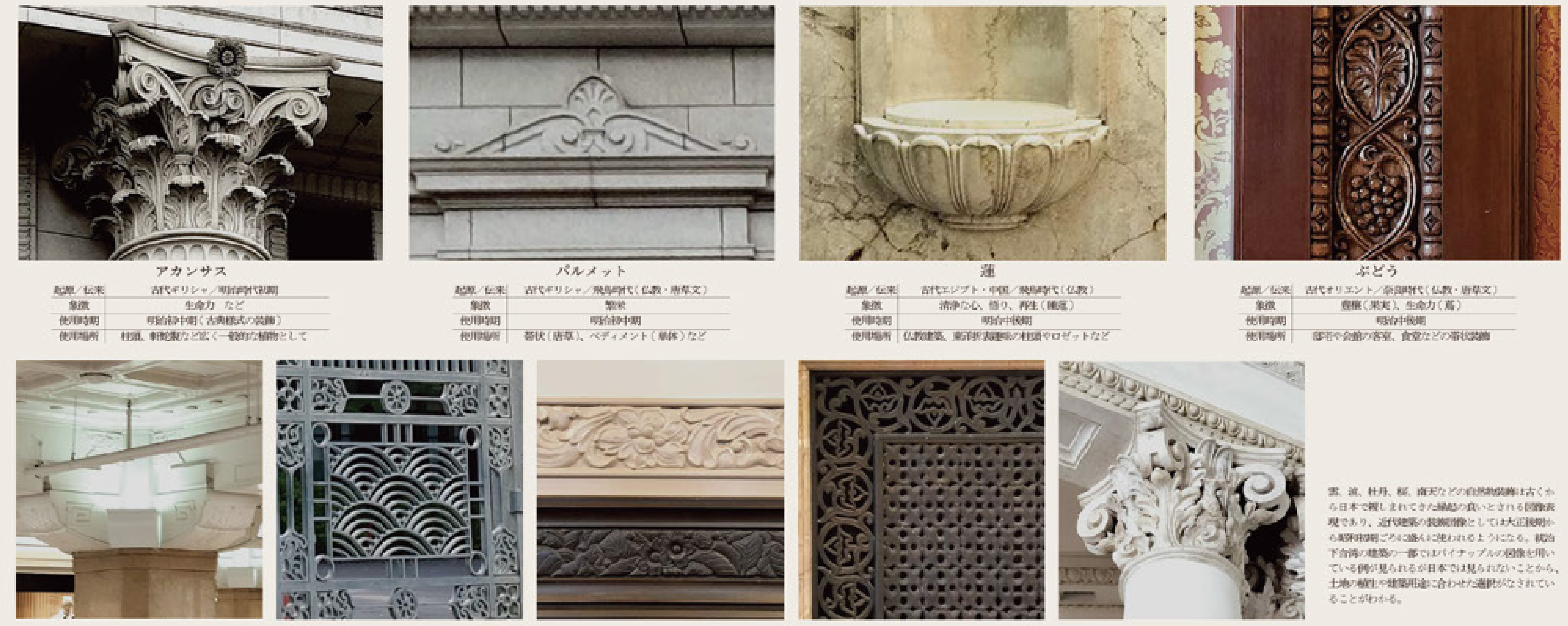
iii. 制作・加工会社（制作）



装飾図像類型

自然物装飾

植物・自然物の装飾は細部に用いられるため動物や紋章などに比較すると象徴性は高くないが、多様な表現手法により様式の統率、美観、建築空間の演出に大きく影響している。



アカンサス	
起源／伝来	古代ギリシャ／明治時代初期
象徴	生命力 など
使用時期	明治初中期（古典様式の装飾）
使用場所	柱頭、軒蛇腹など広く一般的な植物として

パルメット	
起源／伝来	古代ギリシャ／飛鳥時代（仏教・唐草文）
象徴	繁栄
使用時期	明治初中期
使用場所	帯状（唐草）、ペディメント（単体）など

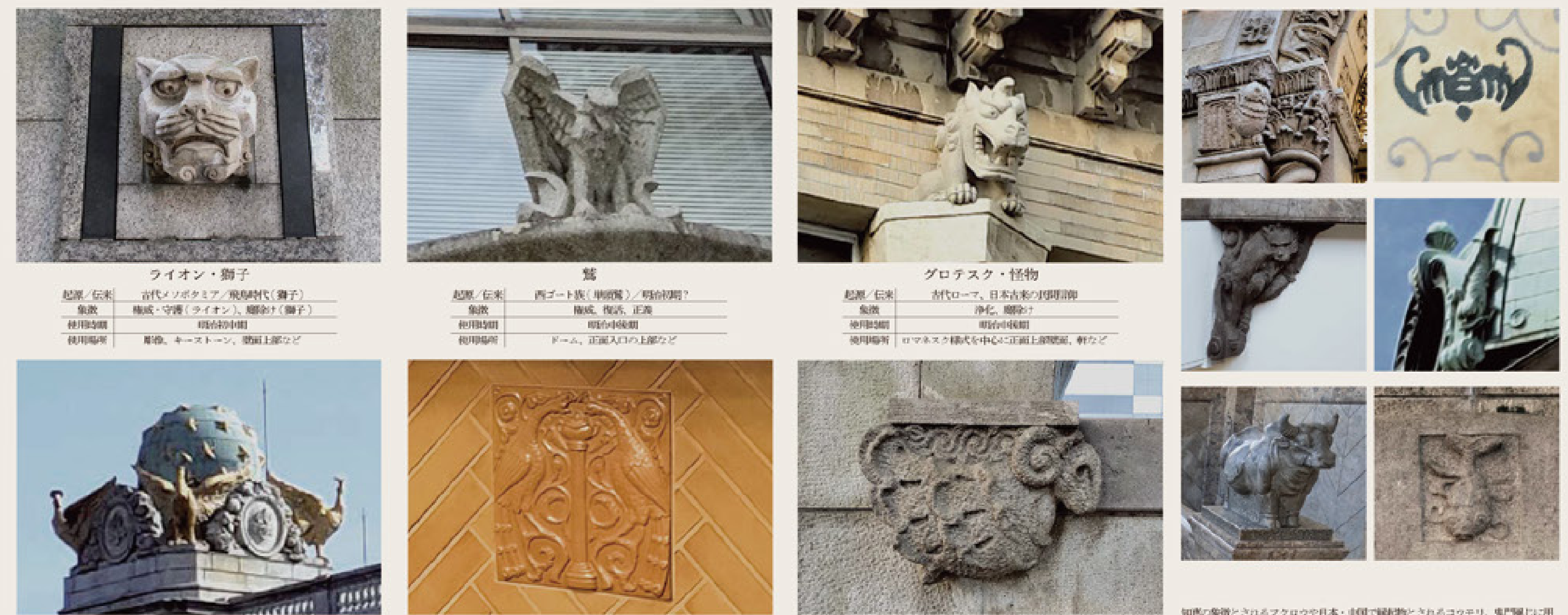
蓮	
起源／伝来	古代エジプト・中国／飛鳥時代（仏教）
象徴	清浄な心、悟り、再生（睡蓮）
使用時期	明治中後期
使用場所	仏教建築、東洋折衷趣味の柱頭やロゼットなど

ぶどう	
起源／伝来	古代オリエント／奈良時代（仏教・唐草文）
象徴	豊穣（果実）、生命力（蔦）
使用時期	明治中後期
使用場所	邸宅や会館の客室、食堂などの帯状装飾

…土地の植生や建築用途に合わせた選択がなされていることがわかる。

動物装飾

動物装飾は使用頻度は低い一方、目に付きやすい場所に用いられている場合が多い。これは動物の持つ象徴性によるものであり、装飾としての意味の強さを示していると考えられる。国家建築として建てられたものには獅子、孔雀、鳳凰など古来より使用されている動物装飾がよく用いられている。



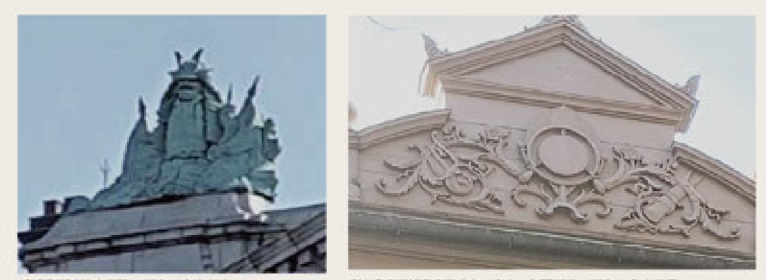
ライオン・獅子	
起源／伝来	古代メソポタミア／飛鳥時代（獅子）
象徴	権威・守護（ライオン）、厄除け（獅子）
使用時期	明治初中期
使用場所	彫像、キーストーン、壁面上部など

鷲	
起源／伝来	西ゴート族（単頭鷲）／明治初期？
象徴	権威、復活、正義
使用時期	明治中後期
使用場所	ドーム、正面入口の上部など

グロテスク・怪物	
起源／伝来	古代ローマ、日本古来の只明印
象徴	浄化、厄除け
使用時期	明治中後期
使用場所	ロマネスク様式を中心に正面上部壁面、軒など

器物装飾

紋章装飾



建築装飾表現と技術の変遷